



源氏辨引抄

ナ



九
車

蜻蛉

宇治第八

蜻蛉セイヤの蜂ハチ乃なりどしく目めももんてぬ虫むしと云い朝あさはて
夕ゆふも死しすり虫むし也なり能よ目めがす枕まくらも春はるの陽ひかり気きと云いて
空そらよりくくと目めももんてぬ小虫こむし也なり軒端のきえに遊あそぶと

よあり

又また蜻蛉セイヤの虫むしと云いて又また草くさの名なもあり蔭かげも似にて
ふなよわけりよのやとつらう也なり又また陽端ひかりの春はるの
目めえの光ひかりもやわらぬやとつらうもわけりよ乃なり
ゆかり春日はるひとらあり

つと三説さんせつは此卷このまきの名なもふ石叶いしは也なり

路ひと女君ららるる心入りしるるを
白時方いりしん是

人のみどりくわじんと帝釋も人しは

宋玉為屈原作招魂辭曰帝告巫陽曰有人在下

我欲輔之魂魄離散汝巫子之王逸楚辭章句曰

神醫帝謂天帝也巫陽

餘生欲老海南村 帝遣巫陽招我魂 東坡

楚天帝釋へ人間とつるを天と帝釈へ切利

天のまじ戒抄子字法大納言物統よ津藏貴取が

又善相云のせしを祈りしるるのありし

り又河海の祝あり何と家よ石叶別の帝釋

の人乃死せらとみしるる中縁ありし

女のたよぬいけしよいと帝にもあつた

あり

楊貴妃帰唐帝恩 李夫人去漢皇情 源順

の飯らうしるるげよのめしるるありき

波こゆるはたしむ松まつんものこひけり

鬼やういしん 伊勢物語に鬼やういしん

てりといふ河のほとけ國産の大納言をこの糸

糸とれ通しなりしと鬼とら子誠の鬼よ

あつと又江談云ぬ松帝五十八代 時仁和三年八月
武徳殿の松原に有鬼食人是則大怪也同廿六
日帝崩御是其徵歟これ鬼の人と云ふに
め一也

きこゆ物やとりめりぬん

花 説文云

狐妖歟也鬼所乘也寛平 五十九 年中備中

國賀陽良藤狐よつれて十三日倉の下にあり

あり

なきいげみや申すまひ路り

歎いひかると控せぬいげよりぬあつんほ母

やさし程きぬと やさきいづつ

河古今 何とて力のつよ老ぬん年たぬんことぞやうに

法師の泣りて焼と

孝武皇帝前漢 上曰吾聞黄帝不死今有家何也

或云黄帝已僂上天群臣葬其衣冠史記

室の八嶋の爐の故事人もるれと死人あるより

いて葬りてる例なり

げよるまきいげよらみよきいりや 前子ほ丹

のすれられいげよりぬあつん

とあるよあつていげよとらり

月さらして今日ぞきつる海とよひおほふ日の夕暮
 月さらしていづ月よ成ては月十日は浮舟と蒸入る
 一はゆんと蒸て走られしうづ月十日と今日ぞ
 ときつる浮舟入水とよひきし三月下旬也
 不雷抄出云月さらして五月より一次の詞は御
 前とに揚の香のるゆきよ子規のこよひ啼て
 五月歌なり
 日の夕暮いと物あそべれり
 何 廣衣日も夕暮よなる時わくもごとく人いそぎ
 宿よのよびやいづらら行ふ

河古夫

おほ人の宿よのよび時をけりてをれ啼と告るん
 悲ひもや君も泣らん甲斐もなれとての田長よんかよ
 け つらけ田とつれら時とての田長と涙文くぶ
 時鳥い眞遠より来るも也来て農耕とすむらぬ
 過時不熟と啼依之とての田長と呼とよめる也
 万葉よいりて名もくせあり我名とよぶ故也又
 いづへあま鳥せあり
 死出山おえてまらん時を並き人のよきま
 心えぬ海のはせしこ
 浮舟巻よ葉よりけり
 波こゆるれもさむ末の松結らんとこよひける

らんまの帯

班犀帯

班犀帯は五位の人帯

用之公卿の服者へ烏犀帯諫闕より班犀と

さす也

六十僧のふせ

六十僧は六波羅密

布施持戒忍辱精進禪定智慧

比一又六道よあそく行はる也

三代實録云貞觀

五十六

十五年七月五日辛未

延六十僧於紫宸殿限以三日轉讀大般若經

外六十僧とめ寸例なり皆大般若經轉讀の

よ也又御中陰の佛事よ六十僧請せり

り之例也七僧も六十僧の中よあそく也

七僧のまへのりせせ勢路へり

七僧のまへの僧食のり也七僧は會はて十九日

より小り也誦師讀師咒願三礼喫散花堂

遠と七僧と云

かゝるぐでゆへある紙も事なり

仍是云引奇

未勸公小宰相う力と浮舟よりくくは董の款也

やめなりへき也也正徹掃月室町殿慈照

講釋の時慈照院の仰よ依撰集十九

辛未代多佛也
寺と院取製

多枕紅葉造りかゝるふんとくたぐ地なり也

と云可致款とありり時拓貞院へきりり也

念ぢりりしき

おすくろり人の海もに土まじりのらりぞすり

陳鴻の長恨歌傳云顧左右前後粉色如土

楊貴妃の前まで三千餘宮女の土の如く也

今女一言よんくべてい宦女の土の如く也

繪よりきて色きん人ん人いんくやありたり

前漢の六主武帝の李夫人の病死の後法に

ついでん結ひしり也

すきをみよふき一記あることわたりけりたり

蕙乃が妻女之宮のあひのあひの文 母の文 中言 とんよ

りけて蕙のつひより結り相成申言と蕙といは

かよてふあひの文の蕙の母この姫よすも

女之文の版のつひのあひの文の妻も成結ひ

蕙へ對してあり女之文へふあひの文の妻も

よりいつつと結とあはと母申言へるる結り向て

ひき筋同なるるも恨結ふゆ好きのゆゑ

母所もさひより結とあはええ素蕙のゆゑのこ

よすくみ実あつ人なれい也如けりるる子礼儀

ありてむい人の智賢もその人の乃非なる

と知り

交ももひきし女ももひきし
あり海乃よづめとてあめありり
け初感あり自文にも浮舟いよ
或いあそめたにせし人
人よとてしるあめ

のいさそい申しゆりされ
いよかみとそらうり
あそとそそのゆりあそ

侍と稱と 不審抄出云辨
及若せんい月にあそ稱と又若
恥べきゆいあそいさめ
不審抄出云辨
といよと押して羞の我も恥
あそいそに信されとあそ

女郎むみくろく野色よ
女郎花かやう野へも宿りせ
中よつていそいそにゆり
大底四時心惣若

就中断腸是秋天
朗詠 白樂天

わさい物うか人のらりと、の正風ありいあり

論語回述（論語）而篇曰子曰善人吾不得

而見之矣得見有恒者斯可矣亡而為有虚而為

盈約而為泰難乎有恒矣有恒者其心ヲ貳ニ

セズ善人ハ仁ニ志シテ惡コトナレ恒アツテ後ニ聖人至ル

也恒アル徳入門也

竹とく種とまゝにわさるゝ後よとの後ハ

遊仙窟曰故將纖手（遊仙窟）時々弄小弦（弄）耳聞猶

氣絶眼見若為憐（氣絶）女の琴ひくとまてつる也

唐の則天皇后ハ張文成（唐）が義男のりもれあれい

りて碁のあひまゝ一戦會合せり後よ互ふ

法と忍れて會するも一（法）文成（文成）仙女も一

會するも喻て文と作り肉裏と仙洞よは

まゝ遊仙窟と号也

あはべきものやゆるべきもの

遊仙窟曰容顏似舅潘安仁之外姪（遊仙窟）

氣調如兄崔季珪之小妹（氣調）朗詠妓女部入

潘安仁ハ晋代ノ義男也崔琰字ハ季珪義男也

妓女ノ義人ヲ姪ト妹ニ比シテ作ル也

言より解とめられり

可
あつてよるうらみはもを君計とてはたて思はん
松もじりのい乃とわがあらりくも也

可
たせよとも知人せん松の松も昔のなるくま
わけりよ 可
わけりよ 説く一様るくど遊系式野

馬モをいりりシ 師云
林希逸が莊子、口義云
野馬遊系也水気也杜子美所謂落花遊系白白

静カシ 可
静く和すよ系あそぶせいゆめりり
莊子翼云野馬遊気也又云野馬天地间気如野

馬馳シカ
あはるり記のや例のいりりぐら様よ

花後撰

川六帖

師云

衣ともいひもいひ蜻蛉のあつたは記れきあつ世
はへてもるるたは記れきあつ世
例のいりりぐらとて蓋右大拍常に佛のまんが
無常と観るも無常よ如けられた夕立の雪
乃起タチしとく好きのきざし一糸の交るぐらすら
みんとけけ人もは法乃理と観てあひま
しとくあつとくも好きよとまて末代の人の
教戒とせり

小習

字は芳九

以河為卷名、蜻蛉卷、蓋廿六の時、浮舟君とせ給ひ
— 翌日のゆとまて、を年夢て、蓋廿七の年、
まとのゆあり

横川よびまが、僧都とらひて、つとむる人
惠心院の源信、傍らみ比し、てまらり

元亨釈書曰、釈源信、ト氏和州葛木郡人也、父母
詣郡之高尾寺、求子母夢、一僧与一顯玉、乃姓後
上、睿山事、慈悲、究顯密教、過壯歲、忌榮名、屏居、横
川、專以著述為己任、了親要訣、作了時、雨、天馬鳴

竜樹摩頂讚歎傳教大師合掌告曰我山教法今
屬汝伴生要集時觀世音微笑而授金蓮華毗沙
門天王捧蓋後寬仁六十八代元年六月十日化
壽七十六時天樂響空奇香四散山中草木皆盡
靡西ハクの物終と作一寛弘元年の惠
心僧都六十二歳也

又十ツりのいふいと 源信の妹の安養の尼と

又元亨釈書十八卷願西尼者源信
法師之姉也ハク深以来持禁戒讀法華粗解深義
可受施利普与孤獨ハク當見普賢菩薩降室又得觀

自在摩頂山鳥野孤常來捧果供寛弘年中ハク叙

少の以於 河海ハク載る傳記の母長谷寺ハク祈
て源信とまうけりあり

乃の宛とてなぐやうんや

惠心僧都妹ハク終季之時者必可來會之由僧

都契約ハク而僧都千日山籠之間自尼許示遣

云老病少憑罷成ハク了今下度對面大切ハク雖然

限日數之山籠難出洛可ハク然者乘輿可來會兩坂

本之由反答畢於下松邊相待之處輿已到ハク來僧

都進寄塞簾見之處ハク尼上既逝去相共輿到清義

房二修学一 清教先心經七卷讀之次以火界咒令加
持惠心又奉念地藏則獲生古事談

みどけさうと 金御嶽大和吉野の名

花 金峯山精進後夜子於庭前礼拜金峯山百

度

故朱雀院のいりまやうにて宇治院といひし

河 平等院建立以前号宇治院

花 李部王記天曆六十二元年十一月三日太上皇五

七代 陽成 宇治院遊獵山野又天慶六十一代 八年十

一月十八日朱雀院庄牧勘文云宇治院萱原庄五十九

被留後院今業朱雀院へ寛平法五十九

皇也又号 亭子院 といひ物元の朱雀院書

とせらるる 代に院のいりまやと朱雀院と

ゆへに家のいりまや多帝といはる

町の髪あはれいふよりぬへきんらと

細 方の毛髪いりまや枕双紙き物のあま

出させ行ふ山奥のいりまやの打ゆきいりまや

いりまや乃毛いりまや人のいりまやいりまや

いりまや

いりまやのいりまやいりまやいりまや

水鏡云欽明天皇^{三十一}代の阿^ア義流^イ國^{クニ}子^コ妹^{イモ}女^メと
 求^{モト}る男^ヲ野^ノ中^ノて^テ義^イ女^メと^シて^シて^テ妻^メと^シて^テ男子^ヲ
 一人^{ヒト}う^マせ^したり^ト月^{ツキ}日^ヒへ^て家^イあり^しが^ハけ^し妻^メ女^メ
 と^シて^シて^テ食^クんと^シて^シて^テ妻^メ恐^スれて^シて^テ野^ノ干^ノと^シて^シて^テ
 離^リあ^らり^し

帝王系圖云欽明御宇^{ウツ}參^ミ河^カ國^{クニ}狐^{キツネ}成^ル人^ノ妻^メ

白氏文集樂府曰古塚有狐^{キツネ}且^ツ老^シ化^ス為^シ婦^メ人^ノ顔^ヲ

色好頭^{ヨシカウ}變^ハ雲^{クモ}鬢^{ハヅ}面^{オモ}變^ハ粧^シ大^{オホ}尾^ビ曳^キ作^ル長^{ナガ}紅^{ベニ}裳^ヲ

六通乃内^{ウチ}の神^{カミ}境^{サカイ}通^スよ^シの^ノ分^{ワケ}あり^し祿^{ロク}通^スと^シて^シて^テ佛^{ブツ}

乃^ハ不^レ思^フ議^ギと^シて^シて^テ却^シ通^スと^シて^シて^テ過^ス去^ルの^ノ因^{イン}乃^ハより^て能^ク

の^ノ雲^{クモ}よ^シ登^ルる^ル也^{ナリ}延^ヒ妹^{イモ}通^スと^シて^シて^テ狐^{キツネ}猶^ナも^レど^レ人^ノを^シ震^ス化^ス

す^ると^して^シて^テ

ま^まの^ノ海^{ウミ}や^や此^{コノ}地^チ乃^ハあ^らじ^きと^シて^シて^テ樹^ツ神^{カミ} 螭^{コウ}魅^メ

危^イ傳^{デン}注^{チュウ}曰^ク螭^{コウ}魅^メ山^{ヤマ}林^{リン}異^イ氣^キ一^{イツ}生^{セイ}為^シ人^ノ害^{ガイ}者^ヲ也^{ナリ}

ひ^ひり^りり^りん^ん同^{ドウ}も^も鼻^{ハナ}も^もあ^らじ^きと^シて^シて^テや^あん

文^{モン}殊^{ジュ}樓^{ロウ}目^メ無^ム見^ミ事^ジ歎^{タン}舊^{キウ}記^キに^ニ目^メ鬼^キと^シて^シて^テ号^ナと^シて^シて^テ

朱^{シュ}の^ノ盤^{パン}と^シて^シて^テ繪^エ物^{モノ}あり^し文^{モン}殊^{ジュ}樓^{ロウ}前^{マエ}中^{チュウ}堂^{ドウ}の^ノ目^メ

無^ム鬼^キの^ノり^りと^シて^シて^テ山^{ヤマ}法^{ホフ}師^シなる^ルより^て安^{ヤス}付^ツる

人^{ヒト}よ^シと^シて^シて^テ法^{ホフ}花^カ普^ポ門^{モン}品^{ヒン}曰^ク或^ハ被^ヒ惡^{アク}人^ニ逐^シ隨^ズ落^セ

金剛山

ととと海の三々 花 薬師經より九の横死とせり

六十よあまの年めづらうりものどん経へつ

雲 惠心僧都は物鏡と作ら寛弘元年六十二歳也

銭のこひのむ娘のくりあうらうらめりとして

元 僧都の妹は右左衛門督といふ人の妻よてありしが

娘と名てうけしひの館よ道心あうて尼よまねる

うみくさうその娘は中ねといふ人の妻よてあり

うらうらや

神事よのぬこあまは経よりつらめり

細 心産と神分とて加持の前よ必よひそめり也

うらうらや 調伏也

人の心産といふんとて切まらうりのものもいふ屋

假色迷人猶若是真色迷人應過此 白氏文集 古塚狐

ひえ坂中よとのといふあまをほめひらる

花 大ニ條の園白の女歡子尼よりりて大原より行り也

べ時の人小野皇伝と号せり也

師云 小野は地名也小野九郷とて村九ありて名も九

あり是と大原九郷やいふ大原も九郷の地名

也此より大原と小野一也

クヤクヨウセキヤクシ
子多と火よへる也邪氣子限ど一切の護摩
子芥子とたぐ也

どうつまにたりとらん
命業盡 經文

容面也藥師の十二神將の中よ

青面金剛とあり面の字とめいとらじ又面目

とめがごとくも同一容面のすぐきとらを行
誦とらり

くぞくのびらひもその所らにほせりて行ひけめ

端正者忍辱中成 大集經

法華經隨喜功德品面自悉端嚴為人歡喜見

戒行の切徳あり

るんそれとえんよとらひて

法華經曰佛種從緣起 初階の観るも小野

の厄もやーあるらんき目ありよりて浮舟

君とみらびき路よ増上縁と成行よとらる也

それびだんのりして 無慙法師と早下調へ

唯識論曰云何無慙不顧自法輕拒賢善為性能
障礙慙生長惡行為業

しじりの中もやうら戒いりてめど女の筋よつげ

まごころのまごころとぞ

諸戒の中より廉強罪レのつづり止れども細隠罪レ
ハ悉ク止りし者ハ五戒八戒十戒等ハ廉強ハ
二百六十戒五百戒十無盡戒一切威儀戒等ハ
細隠ハのりき歟

女ノのすらしつげるとも法華經安樂行品曰又菩

薩摩訶薩不應於女人身取能生慾想相而為説

法云若為女人説法不露齒笑不現胸臆乃至為

法猶不親厚况復餘事五卷

くまひりしと

魅女 元亨釈書

ひりしとあひせし法師のつづりある世より

とらめしとあひありきし種子

戒記云昔深敵ハ五十五代文ハ此惱ハの耐金峯山

より久後練行の行者まのりて加持しハもる平愈

の後中出よゆりて年兼の行業と廻向して誓て

鬼とまはり紺青鬼しりハ常子ハ成とま

まひりしと智證大師懇ハ教識しハ法ハいハれハ紺

青鬼ハなりハ交ありてハ麻ハ子ありハありハ成ハひハ子

子成て満ハ子ハなりハをハ後ハ成ハひハ子

なりハ善相云の記ハとんえハりハ大師のハなり

いなきもや又滋賀寺上人朝勧上人等此例

切

自^聖交^聖のり^聖うう好^聖きつじき^聖もて父母^聖も^聖う^聖る^聖を

うけ又世の中も是と疵^疵も^疵う^疵れ^疵入^疵り^疵。蓋^蓋大

おら初^初う^初り^初法^法よ^法ん^法め^法法^法よ^法ん^法け^法て^法世^世深^深の^深ん

うすく好^好き^好の^好き^好を^好守^守時^時も^時ん^時ど^時ら^時め^時と^時く^時り^時法^法へ

作^作法^法記^記せ^記ら^記り^記や^記一^記家^家よ^家ら^家り^家あ^家の^家詞^詞子^子法

師^師も^師好^好き^好の^好ん^好き^好ご^好一^好て^好い^好法^法と^好じ^好る^好く^好や^好一

て妄^妄執^執の^執念^念だ^念う^念い^念悪^悪鬼^鬼と^悪る^悪り^悪て^悪人^人と^悪る^悪や^悪ま

一^一ころ^一か^一も^一ら^一あ^一ら^一あ^一ら^一う^一万^万劫^劫の^劫よ^劫ま

い^いと^いら^いら^い好^好く^好也

い^いと^いせ^いら^いぬ^いつ^いら^いも^いご^いみ^い 引^引き^引と^引る^引の^引詞^詞子^子と^引角

可^可と^可せ^可ま^可い^可せ^可に^可あ^可つ^可も^可警^警我^我と^警ら^警し^警向^向け^向り^向

天人^天の^天あ^天ま^天く^天だ^天も^天ら^天と^天ん^天ん^天ん^天も^天う^天ま^天ら^天ま^天あ^天や

う^う記^記 行^行法^法後^後子^子行^行法^法の^法弱^弱く^法や^法如^如と^法え^法ら^法し

も^も八^八月^月十^十五^五日^日教^教子^子天^天と^教一^教たり^教一^教も^教う^教ら^教ひ^教て^教あ

や^やう^や記^記と^記ら^記り

本^本の^本あり^本一^本や^本ら^本う^本人^人の^人智^智来^来て^智お^智そ^智つ^智ら^智ら^智ま^智ん

せ^せ一^せき^せれ^せら^せり^せあ^せら^せれ^せる^せい^せ我^我あ^我ら^我う^我法^法れ^法え^法い^法ひ^法お^法れ

ゆ^ゆら^ゆせ^ゆ 浮^浮舟^舟の^舟せ^舟れ^舟つ^舟ま^舟ら^舟う^舟に^舟氣^氣の^氣な^氣ま^氣り^氣人

蓮子敷盃ミカサナイ冷酒サマシ 柘枝一曲コト試春歡ツクシ 樂天

水餃子盃とさへて出づら飲又只なるれい蓮の
宴もあつてき飲盃とるもの宴とらんもあま
りよとよめ記さう飲

急判ごいごいごいごいごいごいごい

さあめとく飲たのよばあつていあめいあめいあめい

河白ふらんとくらずさして

三拾送

宴もい河白らん女郎む人の物いひさうとん世子

通照

昔物後のららとすつらあとの路よ

弄

任そ物語子

中宿とよ子人の贅物さう姫君然もんえすまじし

と初瀬より一ふ経言もあつて昔ありしあ

為ぬれい居ら遊の中うそ姫君琴と川とあ

とあ一也面うげ宴も似つらと也

小たつ将

河 小鷹將

万葉新点

まつらの山れもん

待乳山

紀州 駿河 下総 同名 三所也

これとて待乳の山乃女郎む林と贅物らんをあつて

いふたあつて 川舟のけさうはしてと云哉也

古今

花とるんあつてすれ女郎むうたあつて酒のあつて

松虫のいふとあつて

林の野い人待虫れあつて試さゆめさういふとあつて

廉のせしきもよむとひらりたり

河合 世に秋の風もよむとひらりたり廉の啼きよ同とて

みえぬはなもえぬとて

河合 世に秋の風もよむとひらりたり廉の啼きよ同とて

あつらふとて

可惜夜 目下 情夜 百

河 あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

あつらふとて

可ニテ羨タリ々タリ俗人耳ニ 好ト不ズ好ニ也ニ

所以北窓琴 日々生塵土白氏文集

松風色河のゆくもくもやと 松風入夜琴百詠

琴河女子嶺の松風河のたゞの尾河よりとく河

念佛河よりやのあぶ河とさ河をせ河や

万事家生皆捨離河專心發願河向西方河

ふけ河あら地り河く河なり河な河 これ河の河唱河や河

ふと和琴河より河て居河の河門河なり

後河松 弟河等河乃河喜河面河白河く河す河ゆ河つ河花河ら河り河と河あ河け河ら河り

秋の葉河よ河と河ら河ぬ河り河ら河し河よ河と河づ河れ河ら河り

後松

秋の葉河よ河と河ら河ぬ河り河ら河し河よ河と河づ河れ河ら河り

あ河り河ま河り河ら河ら河て 寒河報河也

命河ま河ら河ふ河叶河 浮河舟河の河之河母河の河ふ河ひ河く河我河と河初

渚河子河海河く河で河を河送河り河ら河し河我河と河初河生河も河ま河く河芳

と河ま河ぐ河ん河と河せ河ら河ふ河ん河の河ま河り河ら河す河と河う河ら河り河

是河併河愚河癡河ら河り河ひ河る河也河 初河渚河の河初河生河と河あ河り河

て河不河思河議河ら河り河東河海河の中河人河蓋河大河船河の河出河あり河て

定河所河へ河む河ら河り河系河よ河ら河め河く河あ河づ河ら河り河と河そ河て河日河

さん河と河せ河ら河と河我河ら河も河た河来河下河呪河の河あ河り河も河ま河れ河ら河り河

新編卷二十

るものとえをいへりて身とらげんとせしと今の近ごろも
於詔書の利せよあむむや詔書種子波浪不絶後の
擧るのあむれりるもの也即果のれづるまゆへ悪
目とめて善果とらふゆりや科人の佛も地
獄へ墮れり

尋もゆりてさるりの杖

河古今

初瀬川が川のよこ中流の杖年とて又もまゑんこかあつ杖
ませの杖とこよりりて

茶聖大徳

茶聖の肥前國藤津郡大村の人也俗名い備前
掾橋良利出家して寛蓮子といへり也寛蓮の

為亭子院五十九上法師亭子法堂山ぶこ

竹小師法儀一りり大和抄に載り茶のよ

能るりよりりて茶聖といへり裏書云法名よと字

あつこ公家も今もあり 花同之

花

延喜三年五月三日茶聖奉勅作茶式獻之

抱朴子曰園茶者世謂之茶聖故嚴子卿馬後明

有茶聖之名也或書曰唐堯造茶教其子丹朱

一説曰不然茶出於戰國之時

ちつらんりのやうよ

花古今

い藤の葉子を初茶の杖とせむと云いつくやとよめ

小舟の色をたぬりも繋り流しと

浮舟をよむ文字舟をて川のむらひへおそかきす時

年ふれおんけの橋の小舟が啼きも繋り流し白き心ま

橋の小舟の色もかきとけ浮舟を向後とれぬ

初より流きながるものごとやうに物し流し人いけ

折の折をよむおちるをよめりたり

浮舟のふも蓋のふも法なるよりい白文の花やう

ときやうくおよむいつらと今とつゝ実りこくと

也幕末巻ふ定めもあどくおよふやうきふいやく

て実しこの実もよむ一むらきもいこくと

りしにあらう打るるよ解くさくさく流し

これどねの筋とこまやうに申えさうい

ふの筆きえそらんむせど今とびねるうて

んまの粒おちらよらんよりうらさ

からうとて鳥れ啼とききてり娘一母のれおと

まてやうらんらんらんといあし

山言れりうくと啼聲きけいよをよむ母しと

かれとてしとひりうら

河原橋 ぼら橋おれれしを鳥羽おれが墨髪とやぶれん

いさらてとて起し流しりうらうかがせと年月

あまの女のぬれとらふ地りていづへいづへいづへいづへ
浮瑛物鏡よのきりありきり世中とくといひ家
びりころ女が久ありて後悔して男のまへ
やりなま

今とて高うまれた縁とば人の心もあはれ
思して道心かろうやまゝ又もあはれものまて
まらぬぬれものそ代この高僧もたわさくは
人まゆらするを嫌へり

みづらぬありりり一程よまらやうほし
空枝云やうまて志が浮舟の心也ん流つうく地

へよ〜らららあうべきとのんぬぬぬぬぬ
〜り〜り同何也

ろそん三界中ありよまも

流轉三界中思愛不能断^断息入無為^{無為}真實^{真實}報恩

昔

硯よびういていひあやうおまもあひよのこ

夏の心ととりて同雅集よ

つら〜く硯よびよあひよあひよあひよあひよあひよ

名おとそら〜りてみまがうのべせ

御^御修^修法^法の^の執^執

眾可ろきけもの人 細 忍辱の人 端正なる人

いよせしうとて

翻譯名義集曰 羈提奈言 忍辱 瞋恚 憂愁 疑 嬌 欲
憍 慢 諸 邪 見 等 能 忍 不 動 是 名 法 忍

けあらん今一葉のうとれがーとついでせ

白氏文集の顔色如花命如葉薄きこれに陵園

妾とつり命と君命也君思のうすきとつり陵

園妾と一人のゆゑあど捨られら妃と陵

とすの役は高らうとつり也今妾の命の字と

いのらとつりて壽命のあさる方にいひて

菊ころり面白

松門子曉つりて月とくくす

松門ニキイホテ曉キイホテ到月イホテ徘徊イホテ 栢城ヒコモス終日ヒコモス風セウ葉セウ瑟セウ 白氏ヒコモス文集ヒコモス

右ノ陵園妾ノ 句ノ次ニアリ 徘徊ハ立也とてぬせしりぬとて

せむく之留君の少野子信好ハ陵園の妾ハ

いよせしうとて

今日いひ給ゆとよ吹風の音もつらげそきま

栢城ヒコモス盡日ヒコモス風セウ葉セウ瑟セウ 文集ヒコモス 陵園ヒコモス妾ヒコモスノ句也

髪へあまのあまぎとひらげらるる

たき屋の髪ハゲの末ハゲのひらけらるる

まのむきかきものとしてその扇の端の様として
る也 細流 至徳記云捨扇の端とあきかき
て扇のさざら糸をくはしとまよ也

すへてくら本あきのやうにして人よすくられてや
るん 河 莊子曰 カチハコト上 可使如 チカカ 槁木

細流云死灰 高本 のしくやんよてあらん
女の道よ多しむと多き着すう故也天理よ多し
故よ多とわらび一人と頼しめ父母ともづめ
家と礼一國と礼とと男子と同一也 婦道
とまよび法と守とまよ本分の公理とまよむすはれ

付のせんのどくよ是と非ととんよ 澁合 して心
かまうと忠恕の心とよ也 初誤 て白まよんと
深着して勇と忘れ礼しめと受て今亦中
まよにまよびふふたれりる 非道 人なるべきよ
先非と悔てまよりまよ 良 とや所一 世深 のん
と 誤 して 誤 て改むらよ 憚 らぬ道よ叶り 莊
老の通へ力と 槁木 のぬよして 中分 の 虚無 と
まより七情よんと頼らまよ 一 せる 犯 よして 世
の善惡是非とのつゆ 若 是 汚穢 石 淨 のけが
らら一 き 色 身 着して 中 の 本佛 とま

うひのまよマヨ覆フクレ天命と流ナガずして力をわらわ
すスす歌ウタてもれあまらありあつる也

まの志シら—もみえず

いづくせまはれう—いんえまのじまごみりけし山山塘塘

君ミコぞはどよとの流ナガひ—人ヒト 浮ウキ舟舟卷巻白白糸糸

のうウよ

顔カネの香カけの氷ヒヨウうウまけて君ミコぞはどよひヒいまイマぞ

春ハルやじり—のノとこと花ハナよりヨリも

所古今 月ツキやあつぬまマや昔コトは春ハルあつぬ歌ウタ角ツノつツいイのノほホは

けう伊勢物語よ去年とさひわけてよあつと今イマもあ

君ミコも梅花とんて素平のんノとさひ合アせてとれ
よりヨリもモさサよヨんとトうウせセ流ナガよヨとト也

あアらラり—白シロひヒのノ志シらラよヨ也

あアらラりし君ミコが白シロひヒの志シらラた梅花とぞけいケイまマわワらラり

世中セチュウのノつらツラのおオ 左サ大臣大臣一ヒトとト一ヒトのおオとトいイふフ或ナ

又一マタのノ人ヒトともモよヨ又マタ執シヨク柄ヘいイのノ一ヒト産ウツ故コ梅ウメ一ヒト人ヒト又

謂イハ一ヒト所トコロ—明云 賊ソク原ノ曰イハク官クワン中チュウ事ジ一向イツクウ左サ大臣大臣統トウ

領リョウ之ノ故コ云イハク一ヒト上ジョウ関カン白シロ之ノ人ヒト為ナシ左サ大臣大臣時トキ右ウ大臣大臣行ユク

一ヒト上ジョウ事ジ

きぢらりづつものわらびぢよのづつ〜〜ひち

夢浮橋

宇治巻十

一巻 法師

巻名以意付より夢の字五ヶ亦あり夢の浮橋
とつきさるる詞は巻名と初と守古なりよ

世中の夢はさるるの浮橋り打さるるつて物とさるる
けりといひしやう然浮橋と夢いなるは
も行きのまれの橋なほさるる定家の妻乃鞍の夢
の浮橋とよめりもさるるしより也 莊子の篇は道
遠遊といふも遊の字いふ物也 兼と計は短くして
優るぬま浮橋とさるるけ物短の寓言に准て
作しや也 兼廿七歳の妻乃とさるる

仍覺云源氏君誕生より五十二歳までと云うして
幻の春までと云うより薫太夫の七七歳までと云うして
夢浮橋までと云う世界は皆夢幻乃どくはる理とあ
らひせり

所云案云一部の中は玷なきものごとくなる行迹
女の鑑こそよきと云うる一幻巻までと云うより
習君の婦人のみよきと云うるを云うる
中と夢の浮橋までと云うる夢のむじろきもの
也無相也有益の諸法は如夢幻泡歎と云うるを
流らるるを云うる源氏君の文章等と云うるは初

かよりのおゆとあつては血氣不調志不定りの
若年二十以後と教へきなり十二目線の中を
三三歳より縁を對して去塵と云うる未別苦樂觸
云五六歳より十二までと云うて若と樂と中庸との
三境と覺と愛といふ十のふより十八れまで貪
境如渴求飲なりと愛と云十九以後貪欲轉盛は
して取取ありと取と云法句經よ六賊といふ六
欲と戒中には三欲と大也と守煩惱の中は見
惑思惑の二と断一がこきりすと見と思のう
らひも思惑難断如籬條とあり却初より未來

際まで煩惱の最第一の災は好色なり也人は是を
 一にけり時の中分の理ありけれ中んあきりり
 不備なるくろくも天理よきごとく時を力にま
 家々のいひ國をさまり天下平也源氏君の大内記
 と師と一儒道とまひ佛教とまひ六十卷とき
 ありせしむも男は好むるまじくと多欲ありて婦
 乱也句文一向は婦亂もて万事を忘れ人のそ
 一のとけけけり蓋大なる優婆塞言と師と
 佛法と好むひしる好色とつるも不信妄念の
 きまふなご心と心力と入りて作法より一

りきまふ又い道と知んる也心と知い力も行ん
 る也心よりものあれた心と知いのま一況也
 一のと也

夢、浮橋とて思てりり時一節中巻帝皇
 代の百七十五年天下靜謐もして浮花より時
 色とこの心と忘れ樂とまひむむ人い道と
 一しるこのゆへは聖者必衰の理とありり一
 常迅信速の義と述り畢竟空理も帰入せり
 むらひ華よはよ別していもねる居されてより
 奥より又常陸より都へのかりてもよ

の東海よりつりて空海よりつりて好まざるを
めりとするげんごし物類よきなりぬ野よりつりて
つりてくるとくるとくるとくるとぬるのうけり
喟り 弄我

涅槃經曰生死無常猶如昨夢

大圓覺經曰始知眾生本來成佛生死涅槃猶如

昨夢善男子如昨夢故當知生死及涅槃無起

無滅無來無去

唯識論曰未得真覺常處夢中故佛說解生死長

夜

香山居士曰言下忘言一時畢夢中說夢兩重虛

莊子齊物論曰方其夢也不知其夢也夢之中又

石其夢焉覺而後知其夢也且有覺而後知此

其大夢也而愚者自以為覺故竊々然知之君乎

牧乎固哉丘也子女皆夢也予謂女夢是其言也

其名為尸詭万世之後而一遇大聖知其解者是

且暮遇之也昔者莊周夢為胡蝶栩栩然

也自喻適志与不知周也俄然覺則遽然周也不

知周之夢為胡蝶与胡蝶之夢為周与胡蝶則必

有分矣此之謂物化

浮橋 倭葬諾倭葬冊尊天浮橋の下にて共為
 夫婦一途に陰陽とてとめ洲國とせざらん
 部邦の始也是男女のくくひの根原也いんと巻
 名よめうせて申さる浮橋は生死の起煥燭の根
 元也

ひりー御統子たまとのよと記さるらん人のくくひと云
 魂殿 花鳥 續殿 葬礼記式 續 人ヲ置取也

宗祇云仁王十六代應神天皇の四子子難波の五
 子^{弟四}皇子^弟の弟子宇治推子と東宮よる一住とゆ
 里路へり天皇崩御の後子先難波の皇子位とす

流へとありされど又帝此にゆづりれどく荒道推
 子^子以^子信^子子^子つき流へと守子ゆづり流ひー時宇治の文
 我あれいそとくうせ流ひーと楯子入をあり
 巫難波の皇子ゆづりて以^以欵^欵ありー楯の守も
 いきりり我の天命也とわがせられ又うせ流ひーの
 あり宇治もそのゆづりおけらるー

念佛ともいみされど 一心不亂 阿弥陀仏
 てんぐ 天狗の凶殺の罪下食とも云す
 正^卯二^申三^丑四^午五^亥六^辰七^酉八^寅九^未十^子十一^巳十二^戌
 日女とい天魔の類よりり凶殺ありゆへもや八天狗と

りある八方子ありつぎいと号を

何生王家無等倫八十之子孫日本紀王

このせうとのまらいと傍都目らめてつめは

ゆい山子がうてあまひはくよすらるるやうあ

やすまどきゆもありつりと打つらうひけ

僧都の男とと愛してつめはくや老僧貴信を

もほを宮内のりまにありと元亨歎書子釋慈實

和州人於元興寺学法相晚設院天地の百

陰陽の氣とよけて万物あり天氣降地氣計の

るよせありものそのことありとあり

若衆の娘ハ大悪華行子男色ありものハ三寶の加

護ありと説り

智論曰形質礙法故曰色也而凡夫人迷此色心

四分律曰迦留陀夷佛のつ子始めて持陰と

行持弄也古老傳云支那曰狎身毒曰非

道扶桑曰若道狎誤狎下甲切習也狎鳥

甲切署也一早瓦重タル比ス歎身壽八天竺ナリ

若道ノ始リ久シ世尊入滅ハ周ノ弟五世纒王五

十三年壬申也日本地神五代八十三方五千七

百九十四年人也

右着道の娘ありはらひぬ此たれた佛法の皆飛て
不嬬と音と也

楞嚴經曰多智禪定不断淫皆成魔属

震旦ノ若衆ノ始ニリハ衛ノ灵公ノ若衆ニ彌子瑕

ヲ愛セリ男色アリテ不肖ナル者也 不肖トハ道ナク

レテ不肖人コニ政ヲ任シテ大夫ノ選伯玉カ賢ナル

ヲハ不用也 女人ナラテ男色モ国家ノ災トナルヲ可

知コレハ周ノ世五代景王ノ時也 日本人皇第三安寧

天皇ノ代ニアタル君ノ車ニノリ桃ノ餘リヲ君ニミイ

ラスル寵衰テ此二事大ナル罪也トテ誅セラレヌ是ヨ

リ以後六百餘年ヲ經テ後漢ノ弟二世明帝 宗 顯

トモ 八年ニ初テ摩騰入闕獻仏經然レハ天竺ノ教ヲ

ウケズ自然ノ道理ニ震且ニモ若衆ノ道始ニル

綱鑿曰前漢弟六世武帝董偃ト云ハ續珠兒ナレ

氏男色アルヲ愛セリ

氏族排韻曰前漢十二世哀帝ハ董賢ガ男色ヲ

愛シテ晝寢偏藉上袖断袖而起トアリ帝ノ袖ヲ

シイテ晝寢ヲシタルニ目ノサメヌマウニトテ王ノ錦

ノ袖ヲ切テ立レタリ帝ノ傍ニ侍スルユト 仰伏ナリ

新編 卷二十

三十八

七年ト五雖廻一記ス董賢ユヘニ親類トモ張禹谷
永杜欽ヲド貴寵セラルト綱鑑ニノセタリ

くらあられ 分散河 聊認るにまづりてさづ

くともゆけと

昔の子れくこひ忘ぬも今い何よすきしとぞ

論法曰誤勿彈改といふごとく一筋よ世とさひそ

われ強り

とるやつなり 差提 白氏文集

一日のすけの切徳いさうりるきさめのなれい

心地観經曰若善男子及善女人發阿耨多羅三

藐三菩提心一日一夜出家修道二百萬劫不墮

惡趣常生善處受勝妙樂遇善知識永不退轉得

值諸佛受菩提記坐金剛座成正覺道

阿耨多羅三藐三菩提翻無上正等正覺

今い世子ありめのたおいごらんよあや一はさ波子面
らりしそ 師云 多智の君世をさひ切はらん也

善惡ハ常ありこれ盛衰の理也或ハ善衰ト

惣とさすさ法なり善惡の二所宮子何なりちよん

とひけしなまは或ハ惡衰トて善とさす多智

君臣のなり世深と切らるらんや凡俗不

善あり時に罪の輕重も隨て寛猛の法を以て
かきむらりの也 惡んより善んの結果なり
中世蓮花の如く地獄と極樂といふ來一也 粟
突ハ善也いが荒皮淡皮の拵なりハ惡也 惡と
去ハ善とちり也

紀守とあり一人の世乃地なり 善智卷よ

字派を浮舟の如く法を以て善より作付
裂末と紀守少野より后公よりなり

そ、や 驚破河 見證 證 蘇顏

けろ、の、人 見證 證 蘇顏

む、れ、の、い、お、き、ど、又、お、が、ゆ、り、も、う、く、は、や、が
け、卷、の、別、して、莊、子、の、齊、物、論、と、い、作、り、奇、物、論
の、始、は、南、郭、子、綦、隱、几、歎、如、槁、木、と、書、て、胡、蝶、の
夢、より、書、と、あり、も、智、卷、よ、す、て、朽、木、を、の、
や、う、と、て、人、は、控、ら、れ、て、や、と、と、ん、と、書、て、爰、は、昔、の、
ゆ、り、の、い、お、き、ど、又、お、が、ゆ、り、も、う、く、あ、や、し、う
と、申、し、ら、る、不、知、周、之、夢、為、胡、蝶、與、胡、蝶、之、夢、為、
周、與、と、書、し、ら、る、存、念、す、る、玄、妙、なり
か、よ、ゆ、め、の、 徳、武、部、が、事、し、ら、る、と、ん、せ、む、と
ら、り、あり、し、ら、る、と、事、の、し、ら、り、板、け、河、は、甚、深、微、

妙の理あり万物皆染の理より皆生してその理乃
感得乃まよふはくはまよふ人の滅しても又元
來の根源はゆり也その理よまよひける流轉して
世とまよひくすはくは世といひ一部よよ下万人の
善惡邪正のみを真如の根源より出らるる事と
法句也題号源氏物語といふ源の字乃そ尾と合
して本よゆめりともまよひ

楞伽經曰十方諸刹土所有法報化菩薩及衆生
皆從無量壽極樂界中出

同經曰我世諦念過去於出時中我真諦來依他

依佛心於入時中他來依我佛心
大集經曰一切衆生心性本淨心本淨故煩惱諸
法不能染著猶如虚空此則衆生國土同一法性
地獄天堂俱為淨土

天地同根万物一體ト云リ天ニ日月アルハ人ニ兩
眼アリ天地ニ草木アルハ人ニ爪髮毛ヲ生ス土ニ
岩石アルハ人ノ肉ニ骨アリ天地ノ六氣トハ風人肝動搖
寒人ニ腎暑ニ焦火濕脾冷熱心火地ニ大海アルハ人ニ血氣アリ空ニ風アルハ人ニ息アリ又天地
五運トハ木肝火心土脾金肺水腎サテ有情ハ火

風ヲ増ユニ煖ニシテ搖也非情ハ水ヲ命ノ根トス
内ニ風ナクシテ搖カス

万物ニ善惡アルハ立行ノ偏ナレ故也神ニモ邪正

二神アリ邪神ヲハ本分ノ理ヲ以テ調伏シ正神ト

ナス況人ヲヤ

師之五代め穆王五十二年辛未年世尊七十八

齡の時立時軍教の機の前は説法今機とて

られて真実と示し強くとありし時は枯華して

示衆次の年入滅せり一字不説といふも立時教

のりも也説つて一とありといふも又其如の理

いふといふるゆへは説くも有る此の機と離

てはもまゝ仏も有る教の机は随ふがごとく。机

體のありとありゆり扱は理法身の如來のそを

つとずといふる。私欲の云ふやうと

凡と名づくは理佛のいふ入滅は故に如來と

いふ如來といふまゝと釋せり體のいふ入滅あ

り立運が机となり又立運は海ら仏教の立運立

行の根かの如く七情と名理よ叶へて行のいふん

ろ也七情と離しと教ありの執着とやめて中道

よ成へきの方位也賢愚共は私欲のろよ偏り

すら故よめかさましづ家そののわすす万民若
しむとあれそて中分のもく行ふと云微也
万民中道よまじき地獄よめりちとあれい淨
土へ引導ぎうだうとらる現世安隱あんいん遮惡あつしよ修善しゆぜんのつとるい
とらるもの也

一也よけ一向なきありその義の題号だいがうの源の一
字よりけ一部の百事いゆりぜんご禪話ぜんわよ一體いつたい万
物とらるやいふも同どう今又かよめめふとら
い同どう一事とらよは似にとらゆゆ除のぞ之のとらとら総しゆんた
高流道達院たうりゅうだうだつゑんにかはもけ同あり是こゝ万物一體

よ端はなすらん也一部たよりた根ねかより出て又拓
かの真空しんくうよかもむく義也ぎ也
以上口傳の秘説也

理のこゝに凡教儒教社道と初としてより
乃書典の事と理との二と具足せり理の辨
より事へ用也理のこゝなるべし事と
めて益ありこの少く事と徳抄よのせて理
と傳相義——其まり首題のめ字よて理の
言と秘傳する切紙あり近來の物語の詞
と教て弁連叙の村本とも師へあれ其式
部が切えい人倫の理とくはありて
とつる師も此ゆへに理学終つらぐと
と極く一花堂兼阿翁と師とつら

り卒とへてありてびの傳釋よ道の原と
けり君臣父子夫婦朋友兄弟乃倫と
——一佛性のこゝりよつらまて和徳をも
てきりあどしり少く理とつらとあるは得
しり仍此抄よその大率とちりて後学
の蒙恩乃こゝけとちりてしり

洛陽七條黃臺山徑悟切臨誌之



